

浮島沼の

沼のばんばあ

平成九年六月五日号

浮島沼が広々とした大沼だったころ、夕方から夜にかけて、低く太いうめき声が沼のどこからともなく聞こえました。これを沼の周辺の人たちは、「沼のばんばあ」と呼んで恐れています。今回は、「沼のばんばあ」のお話を紹介します。

昔々、浮島村にかわいい子ども連れのおばあさんがやってきました。おばあさんは、村人たちから物をもらいながら、暮らしを立てていました。

村人たちは、かわいい子どもにも同情して物を与えていましたが、たび重なるにつれて、おばあさんを毛嫌いするようになりました。そこで、おばあさんは、人里離れた沼のほとりに住むことにしました。

そして、長雨の続いたある年の六月、特にひどく降った雨のため、おばあさんの家は、一晩のうちに流されてしまいました。流れはどんどん速くなり、子どもの姿も見えなくなりました。おばあさんは、流されながらも子どもを安否を気遣い、「ボー、ボー」と子どもを呼び続けました。でも返事はありません。そして、大きなうねりにのみ込まれ、子どももおばあさんも、とうとう死んでしまいました。

それからというものは、夜になると、おばあさんが子どもを呼んだ「ボー、ボー」という声が沼から聞こえるようになりました。村人たちは、この声を「沼のばんばあ」と呼び、恐れていたということです。



昭和15年ころの浮島沼。当時、この周辺の水田は、腰から胸まで埋もれてしまう水田がかなり見られ、ドブッタなどと呼ばれていました。

浮島沼の近くに住む

高橋武次郎さん（境）

私が子どもだったころは、浮島沼が遊び場でした。夏になると、フナやドジョウ、ウナギをとって遊んでいました。でも、昔の沼は深みがとどころどころにあって、とても危険でした。

それで、祖母からよく「暗くなると沼のぼんばあに連れていかれて、お尻のこう門を抜かれちゃうよ」と脅されたものです。事故に遭わないように、深いところには気をつけるようにというのと、稲を傷めたりしちやだめだよということだったので。また、だだをこねたりして怒られたときにも言われました。今から考えると、「ボーボー」という声は、食用ガエルの声だったんじゃないかなと思います。

この話は、もう知っている人も少ないのでは……。今の子どもたちは、忙しくて沼で遊ぶこともしませんね。